

# マルキ通信

平成元年 6月

第 2 号

関西サークル スキークラブ

## 89' スキーシーズンを終えて

指導部 川島徹也

八方の春山スキーを以てクラブのスキーシーズンも無事終了した、野沢における正月ツアー、八方の春山も共に成功であった。

今シーズンは例年に比べ多くの上級クラスが育った、やがてクラブの中心となってくれるかもしれない。加えて来シーズンは上級者数名が入部する予定で一層賑やかになるであろう。

この人たち以外の方で技術の上手下手に関係なくスキーが楽しくKサークルが楽しい人には是非入部をお薦めしたい。一級、二級、共に人数も増え若手、ベテランの上級者がクツワを並べた感じで来シーズンが楽しみである、更に上のランクに挑戦してほしい。

しかし一番の悩みは折角育った若手指導者が現日程の正月スキーでは参加できず又一般企業への就職の学生諸君も同様である。

日程変更についていろいろ問題点もあるが早急に解決しなければ折角の若手指導員、若手メンバーを失いクラブの損失となろう、更に活気あふれるクラブにするため是非とも近年中実現したい。このようにシーズンの終わりと共に次々と次シーズンの事が頭のなかに浮かんでくる。

来年度も更に楽しいツアーを企画したいと思っております、是非共皆さんのご協力をお願い致します。

### 春スキー報告



- ◇ 日 程 3月24日～3月27日(3泊4日)
- ◇ スキー場 八方尾根黒菱スキー場
- ◇ 参加者 総員31名(男子20名、女子11名)
- ◇ 会員参加者 川島(鮎)、谷下、川島(嗣)、橋爪、谷口、
- ◇ 外部講師 真来
- ☆ 級別テスト合格者 (平成元年3月、春スキー)
  - 1級 野田庄次、川島千佳、谷口憲亮
  - 2級 田中正太郎、鈴木達志、牧江克巳、藪内祐介、小寺久仁子
  - 3級 田中玲子、谷口敦子、渡邊正造

例年通り今年も八方尾根にて、会員、正月スキー参加者、を中心に実施。

バーン、雪質などの条件が非常に良く、バッジテストでも、上記の通り多数の合格者が出ました。

参加者から感想文が寄せられましたので、次ページで紹介します。

『 頑張ります！ 』

川島千佳 (セッケン4)

私は、昨年の春に初めて、Kサークルに参加させていただきました。  
昨年は、2級に合格し、その上、今年の方尾根では、1級に合格することが出来ました。これも先生方のご指導のおかげだと感謝しております。昨年以來私は、スキーに一段と興味を持つようになりました。  
今までは、ただただ自己流で滑るばかりでしたが、いまでは、先生に注意されるばかりでしたが、いまでは、先生に注意されたことを頭において、イメージを作りながら滑るようにしています。これからも、もっと上達するように、頑張りたいと思います。



『 今度こそと 』

牧江克巳 (セッケン12)

関西Kサークルに参加して今回が3回目である。「今度こそ(合格してやる)」と望んだ春スキーツアーであるが、今回も講習を受けていくにつれて弱気になってきた。スキーの技術が思うようにのびなかつたのである。こうして3日目の検定日を迎えたが、正直なところ最終日に検定をしてほしかったが雨等で検定不能の恐れも有るので仕方がなかつた。其の日は晴れて雪質も最高で滑り易かつた。その時は「合格」と云う二文字は毛頭に無かつた。

取りあえず「来年の為にも今のを実力を点数で知ろう」そう思って気楽に検定に挑んだ其の結果、お陰様で <指導員川島ジュニア> 丁度合格点に達した。その中には69点が一つ有つたが他の種目でカバーして居り、最後までベストを尽くすことが大切である事を痛感した。

『 自然に立つ 』

田中玲子 (セッケン20)

雄大な八方連邦を仰ぎながらゴンドラに乗る。ブナの樹林帯を抜けると、地肌をみせた雑灌木帯が広がった。「滑れるのかなー」と一瞬、不安が横切る、だが、山小屋に近づくにつれ雪模様であつた。思えば、私は小学校の時、バッヂテスト(3級)不合格となつた。それ以來滑っていない。

だが今回、諦めていたバッヂテストの挑戦を決めた。決めたものの不安が。不安は不安を増幅する。滑りは遅々として進まない。焦燥感が――不安だ。このとき、指導の先生のアイデアいっぱいアドバイス。「緊張しながら、落ち着け」と。このパラドックス。何となく自信が湧く。さて、バッヂテストの発表。「合格」と。この一言を聞いたとき、喜びとともに新たな野望を描いてみた。来シーズンも、私はこの自然のなかに立っているだろう。

『 これからも 』

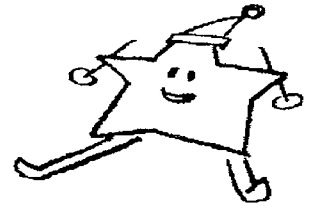
下田美鈴 (セッケン19)

この作文を書くにあたって、色々なことが浮かんできます。何から書いて良いやら整理がつきませんが、スキー講習を終えた時、毎回同じ思いが募ります。

三年前、靴の履き方さえ知らなかつた私が、今日こうして皆さんと楽しくスキーを出来るとは思ひもよらなかつたでしょう。その三年前、初めてスキーを教えて戴いたのもKサークルの皆さんだつたのです。私にとって、Kサークルからスキーを出発出来たという事は、本当に幸運だと感謝しております。そしてこれからもスキーを続けていきたいと、ますます、思いやみません。

## 『 関西Kサークルに参加して 』 田中正太郎(セツクン7)

僕には、今真剣に取り組んでいるスポーツが二つ有る。それは、スイミングとスキーである。スイミングは教える側、スキーは教わる側で真剣に取り組んでいる。そしてこの二つのスポーツによって僕は、Kサークルと出会うことが出来たのである。これはスイミングのインストラクターの先輩である法兼さんが、僕と同じように、いやそれ以上にスキーを真剣に取り組まれていたお陰である。



Kサークルの講習は真剣なものであった。スキーを本気でやろうとゆう人の集まりで今までの自己意気込みが負けているのではと思われた。一日の時間の経つ速さが、講習内容の充実を言うまでもなく表し居り、講習内容は実践(戦)的で基礎、応用と幅広く行なわれ、今まで自分に欠けていた基礎が復習出来たのが非常に良かった思う。

Kサークルには真剣さがいつとき途切れる時間がある。それはアフターである。皆んな今までの緊張を和らげ楽しく和やかに話し、そして笑う。勿論酒も出る。皆この時間を待っていたかの様にも思はれた。今回Kサークルに参加して二級を取ることが出来ました。次回は是非とも参加させて頂き一級を取りたいと思います。「一級を取るゾ」！ 有難う御座いました。

## 『 Kサークルスキー 』

小寺久仁子(セツクン26)

私は八方尾根スキー場が初めてで、大阪から一人夜行バスで着いたものの、雪は無く何処で滑るのか、とても不安でした。そしてゴンドラに乗り、リフトに乗っても「本当に山小屋、有るのかなあ」と又また不安。其の日の視界が悪かったことで、リフトを降りても何も見えず、こわごわ初めて大きなスキーバッグを背負って滑る緊張感は何とも言えませんでした。また、今までスキー技術に関して、S.A.J.の検定を受けたいけど、落ちたらいやだなと思う気持ちでうけてみようと思いませんでしたが、昨年12月に初めて受けて合格し、今回は受けなかつもりでした。でも、そういつも自分の力を試す機会などないし、思い切って受けた結果、合格。やはり出来る時に何でも挑戦してみるべきだと思いました。一人で参加し、初めて会うひとばかりでしたが、スキーが楽しい、滑りたい、と思う気持ちにはかわりない仲間なんだと感じました。

## 『 春スキーに参加して 』

谷下 準一(指導員)

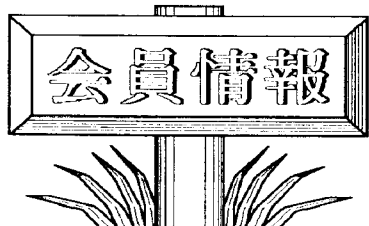


今年は例年に比べて若い方が多数参加され、大変若々しい雰囲気の中になりました。また川畠先生をはじめクラブ員の皆様のご協力によって、事故もなく無事日程を消化できたことを感謝します。私の班は、女子ばかりで、全員仲良く華やいだ雰囲気の中で講習することが出来ました。技術面では、一つ一つの技術を各自が各々のペースで自分のものとしていかれるのを見て、コーチとして大変うれしく思いました。級別検定に合格された方は、さらにより上の技術をめざし、残念ながら合格されなかった方は次回こそ合格できるよう頑張ってください。来年の正月合宿には、また皆様と再開できるのを楽しみにしています。最後に、お忙しい中当クラブの応援に来て下さった真来先生にお礼を申し上げます。

《 スキー人生 》

永廣 富延 (指導員)

スキーを初めてかれこれ40年になろうとしている。その40年間で滑らなかつたのは大学入試の年と年末スキー出発前夜に我が家が類焼にあった年の2回だけである。スキーにとりつかれて何年目か、気違いばかりが集まって俗称”㊦”、つまりマルキスキークラブを誕生させた。キはknight (騎士)のkを、○はcircle (円)をもじって関西の騎士たちが集うスキーサークル、つまり関西Kサークル・スキークラブということになった。これを考えられたのは、もうスキーは引退された関西大学英文学教室の赤井教授である。長い間クラブの指導に尽くされた先生との出逢いがクラブ誕生のきっかけとなったのであるが、それにはクラブ史上忘れられないエピソードがのこっている。その話しは今回は見送るとしてその背景には当時のスキー事情というものがある。昭和30年頃に八方尾根の第1ケルンまで上がったことがあるが、麓の名木山に短いリフトがあるが1基あるだけで、そこに縄を巻いてシール代わりにし、何時間もかけて上ったものだ。麓も茅葺きの農家の民宿だけで丸山と大谷姓しかなかった。日本のチベットといわれるぐらい辺りなところで、大糸線を結ぶ線であり、車両はストーブで暖がとられていた。一方レジャーにスキーを楽しむ人口も年々増えて居り、今のように長距離バスなどが無い上、年末年始の国鉄のスキー客への対応が充分でなく、大阪駅で朝の通勤ラッシュの車輛のように超満員で、次の停車駅京都に着いても乗降口までいっばいで戸は締まったままである。客席の窓も開けておくところから入られるので締められている。そうするとどうしても乗りたい客はその締まった窓のガラスをスキーで突き破って中へ荷物を放り込み座っている乗客の膝の上に窓から這い上がってくる。そのまま信州へという凄まじいものだった。それほど雪山への憧れは大変なもので、たとえばチャイコフスキーという文字を目にしても胸が躍ったし、バスに乗っていても立ったまま振動を腰から吸収するように心がけたり、広い階段はついスキーの階段登高で横向きに上がったり、シーズン・オフにクラブでハイキングに行くとみんなで坂を棒切れをストックにしてウェーデルンの練習をして次のシーズンに思いを馳せたものだった。仕事を離れたいろいろな人との出逢いがこれまでの人生の糧となって今日の僕を支えている。赤井先生との出逢いはそんな中でもっとも思いがけないエピソードに溢れるものであったがその話はまたの機会にして今回はこの辺で。



◎ おめでとうございます。

☆ S. A. J. A級検定員合格 (平成元年2月)  
島田三千男、川島徹也

(A級検定員の検定範囲は全日本スキー技術選手権、指導員検定、準指導員検定、クラウン、テクニカル検定、その他)



《 シュプール 》

スキー用具をしまいこむタイミングをはずしている間に春が来てしまった。例年こんなことを繰り返してしまう。スキーシーズンが終わると、ついこの間までゲレンデで一緒だった仲間ともいつとはなしに疎遠になってしまう。あれほどワイワイやり合ったのにである。マルキ仲間のつながりは、スキー用具を使うだけ使ったら、後はしまいこむのと同じであってはならない。このころのシュプールは次のシーズンまで残していきたいものである。

シーズンオフにこそ、再び友情を温め合う場が欲しいと思うのだが……。 (H. T)